

道草日記(三)

『ももんが』一九九一年七月号

一九五三

八月二十八日 金曜

食事に出ようとして下りて行つたらドウニズが手紙が来ていると言つて渡してくれた。昨日来たのではないかと思つたが黙つて受取る。二十九日(土)午後七時半夕食にお出下さいという文面である。一旦部屋へ戻り日本の絵はがきに参上しますという返事を書く。ゴブランの辻の近くの郵便局持つて行つてきいたら十二フランだった。この近くだから今日中か、遅くも明日ひるまえ届くだろう。

今日は頭が疲れていないうちにケイへ行つてモンゴルファイエの熱気球の版画を探すことにした。彼は三回実験しているのだが、三回とも同じ位の大きさに描いたのが見つかった。一枚二〇〇フランだった。それからサン・ミシエルのプレス・ユニヴェルシテールへ入る。科学史研究年報「タレース」第六号(一九四九・一九五〇)と第七号(一九五一)を買う。どちらも定價五〇〇フランと書いてあるのに両方で九七七フランだという。この勘定はどうも分らない。一号から五号は持つているのである。

十二時になつたのでルクサンブル公園で休む。それからオプセルヴァトアルの方へ向つて歩き、ロシュローという通りからアヴェニユー・デュ・パルク・ドゥ・モンスリを少し行くとモンスリという小じんまりした公園がある。前に一度来たことがあるが、この公園は好きだ。ここを南の方へ抜けるとシテ・ユニヴェルシテールが見える。

それからサン・ミシエルへ戻りパンテオンへ入つてみる。入場料五十フラン、階段を下りるとルソーやヴォルテールその他の名士の墓がある。案内人が説明して呉れるので十フラン渡して外へ出る。植物園の入口の近くル・シャレーというカフェで休む。それからポール・ロワイヤル街の前に行つたことのある床やへ行つて髪を刈ってもらふ。といつても横と後の髪の毛を少し切つてオー・ドウ・ロンをふりかけて終りだ。日本のように丁寧に顔を剃つて鼻毛まで切つてくれるのではない。顔は自分で剃るものと定つているらしい。それで三二五フラン。

金曜日にはルーヴルの夜の展覧（二一・二三・三）があるというので行ってみた。なるほど外側にもイルミナシオンがしてある。中へは入らずチュイルリ公園を抜けてエトアルまで歩きメトロで帰る。

八月二十九日 土曜

朝食をすませて宿へ戻り、帰りのプランを考えたりなどする。

晝食に出たあとぶらぶら歩いて古本屋を見る。今日はたいしたものは無かった。オーステルリッツ橋のたもとの喫茶店で茶を呑んで宿へ帰る。

七時半セルゼスク教授のうちへ夕食に招かれているので少し前に行く。ポーランドの化学者というお婆さんが相客に呼んであつた。この人は英語を話すという。私がフランス語に詰まったとき助け舟を出すよう準備されていたわけだ。私はドイツの学者と連絡を取りたいと思つて、日本を立つ前にアルテルト教授に手紙を書き、イスラエルの會議のあとお訪ねしたいが御都合を國際會議事務局の方へお知らせ願いたいと申し送つてあるが、まだ連絡がとれない話をしたら、セルゼスクがそれではマインツのデーブゲンを訪ねてみてはどうかと言つて紹介状を言ってくれた。帰りがけに教授がパリを立つ前にもう一度来ませんか、と言うから、それでは火曜の夜、夕食後にお訪ねしますと言つて辞去した。私の宿は教授の家からすぐの所である。

八月三十日 日曜

このあいだコンセルヴァトワル・デ・ザール・エ・メティエへ行つたとき、だいぶ見落したのもう一度見ることにする。案内書を持つているのかと言つから、持つていると答えると入場料は払わなくてよいとのこと。これは愉快な話である。今日はパスカルの計算器をしげしげと見る。パスカルの父は税務署の役人をしていたので計算に夜を更かすのを見ていた彼は父の骨折りを省くため歯車仕掛の器械を考案したのだという。われわれが戦時中まで使つていた計算器はこれに手を加えたものに他ならない。

それからアンペールが電気の流れている針金の間に働く力の実験をした装置、またクーロンの実験など。

十二時まで見て外へ出る。それからペール・ラ・シエースの墓地へ入つてみる。

入口にアラゴアの墓が第四区にあると書いてある。留学生が金が無くなると墓地の中を散歩するという話をきいたことがある。ぶらぶら歩いていると立派な墓がある。アラゴアの墓には行き当らなかつたが、探そうとするほどの気力もないので外へ出た。

それから今度はビュット・シヨームンという公園へ入ってみる。山や谷がある立派な公園である。人工の灌もある。四時ごろ宿へ帰つてひるねをする。

八月三十一日 月曜

ひる近くまで宿にいます。晝食に出たあと左岸を歩いてボン・ダルコルを渡つて右岸へ出る。サン・ジャックの塔を見る。チュイルリ公園を歩いて宿へ帰りひるねをする。明後日はフランクフルトへ行くので、心身ともに休ませておくことにする。

今日ゴーロワズという安煙草を買つたら八十フランだった。三年前は六十五フランだった。また五フランだったマツチが七フランになつていた。先だつて幾らかましなバルトーというのを買つたら百四十フラン、この前は百二十フランだった。おおむねこれくらい物の値段があがつている。さつき街を歩いていて何気なくシヨウウインドーを覗いてみたら、オーバー二万フラン、ツボン三千フランと書いてあつた。むろん安物である。

九月一日 火曜

大使館へ行つて郵便をしらべたらドイツのアルテルト教授の手紙がイスラエルから転送されていた。開いてみると九月十日以後に来てくれまいかと書いてある。また九月二十五日から二十九日までドイツ自然科学史、医学史学会があるから、それに出ませんかともある。しかしそれまで滞在するわけにはいかない。

エトワールの廣場のベンチに腰をかけて休んでいると、あるマダムがアヴェニユー・フォツシユは何方ですかと尋ねるので、手に持っていた地図で確かめてあれですと答えた。前にも何度か道をきかれたことがあるが、まことに開かれた世界という感じがする。

帰りにサン・ミッシェルのプレス・ユニヴェルシテールへ行つて本を少し買った。つまり三五フラン値引きした勘定だ。日本では、こういうことは無いようだ。

宿へ帰ってゆつくりページを切って行つたら一二三四ページある。一ページがフランと少しだから本は安いものだ。

夕食後約束通りセルジエスク教授宅を訪ねる。アルテルトからの手紙のことを話す。この前招待されたとき、アルテルトとまだ連絡がつかないことを話したらデーブゲン教授を紹介して呉れてあるから、今日のことを予見したかのような結果になった。アルテルトもデーブゲンも医学者である。

夫人がミュゼー・ギメーを見ておく方がよいと言うので、有難う明日行きまうと言つて十時半辞去する。

九月二日 水曜

ゴブランのクレディ・リヨネーというのへ行つて旅行小切手をフランに替えようとしたら、オペラの銀行だということで其処へ行く。一ドルが三四九フランだという。三〇ドル替えてもらう。それからメトロでイエナへ出てギメー博物館を見る。これは見てよかつた。

宿へ帰つて払いをすませる。少し余つたのでもう一度プレス・ユニヴェルシテールへ行き、前に見ておいた科学古典叢書というような小型の本でダランベール、ラプラス、アーノルト・レイモンの「科学史と科学哲学」など買う。

三時四十五分、宿に別れを告げてアンヴァリドのエール・フランスの事務所へ行く。

フランクフルト行は客がいつぱいだつた。七時ライン＝マイン着。エール・フランスで宿を世話してもらつてアトランティックというホテルへ着く。一休みして町へ出て見る。汽車の駅を見ておく。明日マインツへ行くつもりである。汽車は三〇分おきくらいにあつて、マインツは三〇分で行けるといふ。

ドイツへ来たのだからビールを呑む。アーベンド・ポストという新聞を買つて見ていたら、十月十五日朝鮮会談が開かれると出ていた。

九月三日 木曜

フランクフルトの宿も素泊りにした。それでも一九マルク五〇ペニヒだつた。今朝八時ごろ起きる。昨夜フリーユーステュックという看板の出ている店を見つ

ておいたので行つてみたらまだ閉つている。本屋で町の地図を買う。初めフランクフルトのカルテを呉れと言つたら絵はがきをだしたので、ランドカルテだと言つとシユタツトプランかと言つて地図を出してくれた。ニマルク五十ペニツヒだつた。

駅の方へ歩いて行くとシバイゼハウスというのがあつたから、そこでパンを食ひ茶を呑む。このテーはうまくなかつた。駅の二階に郵便局があつたので絵はがきを二枚日本へ出す。一通につき七十ペニツヒ。マインツ行の切符を買う。ニマルク六十ペニツヒ、一〇時一六分発、グライス四と教えてくれた。グライスは何のことかと思つたら乗場のことであつた。

切符を見せて入ろうとしたら、これはシュネルツークだからニマルクだということ。ここで払うのかと言うと、ドルトつまり乗つてから払えばよいとのこと、と書いてある所へ乗る。むかし日本にもあつた三等車だろうが仲々きれいだった。車掌がきたからニマルク出して急行券を受取る。森や河が見える。河はマイン川である。このフラシクフルトは正確にいうとフランクフルト・アム・マインでマイン河に臨んでいる。

三〇分くらいでマインツに着いた。駅前でお巡りさんに大学へはどう行つたら良いかときいたら、という電車が大学へ行くという。その電車に乗る。二十ペニツヒ。大学構内は人気がなかつたが一人女子学生かと思われる人がこつちへ歩いて来るから、医学部はどつちかきいたら横柄に「あつち」と言つて指した。「ダンケ」とだけ應える。

医学部へ行つてデーブゲン教授はいるかときくと、フェリエンで九月十一日でないと来ないという。なるほど夏休みか、いまごろ訪ねる方が間違つていたのである。持つて来た論文別刷を托して帰る。

駅前へ戻つて賣店でマインツの地図を買う。その拍子にけさ買った新聞フランクフルテル・アルゲマイネを置き忘れてしまった。駅前のプラッツでベンチに腰をかけて地図を眺める。マイン河がこの近くでライン河へ合流しているのである。河の方へ歩いて行きラインの岸辺でしばらく河を眺める。風が強くてかなり涼しい。

駅へ戻つて普通列車に乗る。今度は木の腰掛で今朝乗つたのよりだいぶ落ちる。

各駅停車で駅が八つくらいあった。約一時間かかって二時半フランクフルトへ着く。駅前のフリードリヒ・エーベルト・ストラッセという大通りでコーヒーを呑みパン菓子など食う。その隣りの通りがミュンヒェネル・ストラッセでその六〇番地にSAS（スカンディナヴィア航空会社）の事務所がある。九月二一日カイロー東京をきいたらコペンハーゲンへリクエストするから明朝来てくれとのこと。

地図をみながらゲート・ハウスへ行ってみようとしたが、間違えたのか見当らない。マイン河の岸で少し休み、地図を見直して行ったら見つかった。一マルクの入場料を払つて入る。仲々丁寧な説明がついた。ゲートはセビアのインクを使っていたのだろうか。それとも変色してこんなになつたのだろうか。小宮さんがセビアのインクを使っているのは此処から来ているのではないかと思う。

宿へ帰つたら六時だった。今日行つたマインツ大学はグーテンベルク大学といい、庭にグーテンベルクの石の胸像が立っていた。アルテルト教授へ手紙を書く。夕食に行つたシパイゼハウスのオーバーにミュンヘンまで何時間かかるか尋ねたら、急行で五時間、二〇〇キロだという。日帰りは無理だ。

九月四日 金曜

昨日の新聞にスコットランドに低気圧があつて当地方は少し雨気があると出ていたが、今朝起きてみると良い天気である。昨夜行つた食堂で食事をする。駅の郵便局でアルテルトへ手紙と別に論文別刷を発送する。ドイツ国内の手紙は十二ペニツヒ、印刷物は目方を測つて二十ペニツヒだった。

大学の近くにあるゼンケンベルク博物館へ入つてみる。正確な名称はナトゥールムゼウム・ゼンケンベルク、道理で博物館の標本が多い。建物がだいぶ壊れている。アウフバウのため寄附を乞うと書いた箱が置いてある。

一 一時少し過ぎスカンディナヴィア航空へ行く。九月二十一日のカイロー東京は満席のよし。しかし空席待ちのリストに入れておくからローマで聞いてみてくれという。明日のチューリッヒ行をスイス航空へ問合せてもらつたら、早い時刻はないが一八時があるというのでそれを予約する。スイス航空の事務所はフリードリッヒ・エーベルト街二四番地だから、そこへ行つて九月七日チューリッヒからミラノ行をリクエストする。明日分るといふ。

地図に歴史博物館というのがあから行つてみたら、そこと思われる所は壊れ

た建物ばかりである。戦前の地図と見える。電車で駅まで行つてその食堂へ入る。ウィーネル・シュニツェルを注文したら何のことはないカツレツだ。キルシュを呉れといったが発音がわるいのかボーイが少し考えた様子でキルシュ・ワッサーかと聞き返した。そうだと答える。すると実に小さなコップに注いだのを持つて来た。キルシュはこんな小さな杯で呑むものなのか、敗戦國の貧しさなのか、自分は判断できない。ごんな食事で五マルク八十ペニツヒだった。

駅前通りを歩いているとタウヌス・アンラーケという公園があつたので入つてみる。ペートーフエンの像があつて「アム・ゲーニウス・ペートーフエンズ」と記してあつた。フランクフルテル・アルゲマイネという新聞を見ると東京にかなり大きい地震があつたが、人命の損害はなかつた由。木曜日というから昨日だ。またピカール教授の潜水のことも出ていた。カプリの海で一〇六メートルまで潜つたという。

帰りに宿の近くの道ばたへ葡萄の籠を並べて賣つている小母さんがいた。白つぽいのと紅つぽいのあるから「ウエルへ・ジューセル？」ときくと「バイデ・ジューズ」と應えた。なるほど。私は甘味がちのと酢つぱいのとの違いをきいた積りだつたが、どつちが旨いかと聞かれれば賣る側としては「どつちも旨いよ」と答えるに定まつている。結局白葡萄の房を買つてビタミンの補給をすることにした。

九月五日 土曜

朝食に出たついでに駅まで行つて時計を合せておく。フランクフルテル・アルゲマイネを買つたら今日は四十ペニツヒでだいぶ厚かつた。一昨日地図を買つた本屋へ入つてみる。ブルクハルトの「ギリシア文化史」第二巻がある。第二巻は「芸術と研究」である。第一巻はなかつたが「國家と宗教」であることが第二巻に出ており、カバーに第三巻は準備中とある。ドイツへ来た記念に第二巻を買う。十一マルクである。第一巻はもしあつても直ぐ読みそうにないから、第二巻で丁度よかつた。

昨日歴史博物館を探したとき見つからなかつたのは地図の見方がわるかつたのかも知れないので、もう一度行つてみたらあつた。昨日は壊れた建物ばかりだと思つたが、残つた部分で展覽しているので見落したのである。入口の横に開館時間を書いてあるが、都合がわるいので入るのは止めた。

これまで單に駅とか駅前と書いて来たのはハウプトバーンホフで、ほかにオスバーンホフのあることが地図で分つた。そのハウプトバーンホフの賣店でプレートヴルストを旨そうに食っている人が大勢いるので試食してみた。直径五センチ長さ十センチくらい、の腸詰をブラーテンして芥子をつけパンの小片がついて八十ペニツヒだった。ドイツ的な味とでも言うか仲々うまかつた。

フリードリヒ・ストラッセを歩いてゲート広場へ出る。ゲート像の横手の日かげに石の段があつて余り人相の良くないのが屯しているが、構わず腰をかける。ゲルベゾルテの封を切つたら隣の男がマツチを擦つて火を差出したので、それで火をつけ、有難うという代わりに煙草の箱から一本進呈する。そして彼は「ホイテ、ヴァルム」と言つたものだ。もう九月五日だから東京では残暑ということだが、マインツでラインの川風に吹かれたときは涼しかった。「今日は暖かいね」というのも時宣を得ているのである。彼の隣にいた男が「ゲルベゾルテ！」と言つたようだったが、その男にまで振舞うのは止めて間もなくそこを離れた。

ゲルベゾルテというドイツ煙草の名を知つたのは二十年以上前のことである。そのころドイツ留学から帰つた某氏がこの煙草をすつていて、いい香りだなと思つたので覚えていたのである。フランクフルトへ来てそれを思い出して今朝買つてみたのである。

それからスイス航空へ行つて昨日リクエストしたチューリッヒ ミラノ行はとれなかつたので、チューリッヒで調達することにする。五時宿へ帰り飛行場へ行く。七時少し過ぎ出航、途中ストウツトガルトへ下り、ここでパスポートの検査があつた。八時五五分チューリッヒ着。スイス航空の事務所へ八日火曜のミラノ行を予約する。オテル・デュ・テアトルという宿を世語して貰つた。朝食つきで一丸スイス・フランだ。フランクフルトの宿よりずっと良い。風呂つきである。大体箱型で途中に段の着いた浴槽で洋風のバスよりも寧ろ日本の風呂に近い感じた。



一九五三

九月六日 日曜

三年前飛行機が給油のためか何かでこの空港で一時聞余りとまつたことがある。そのときは夜中でも見えなかつた。それとアインシュタインがこのテレビニツシエ・ホーホシューレの助教授をしていたとき石原純が訪ねて一学期間滞在したことがある。そんな気持で今度途中だから降りてみたのである。

この宿の朝食にクロワッサンとドイツ風のパンと両方出た。そういえばジュネーヴでもそうだった。フランス語とドイツ語が公用語であるのに対応している。ジャムがうまかつた。このホテルの建物の一角に映画館があることが分つた。オテル・デュ・テートルというのはそれから来ているのだろう。映画だけでなく、劇場もあるのかも知れない。

しばらく部屋でブルクハルトを読んだが、掃除に来たからそれをしおに外出する。宿で地図をくれた。明日は月曜で博物館がやすみだろうから、地図を見てシユワイツェリツシエス・ランデスムゼウムというのへ行く。この国の歴史を物語る種々のものが展示してあって面白かつたが、半分も見ないうちにベルが鳴つたので外へ出る。開館一〇 一二時、一四 一七時となつている。

街で「ラ・スイス」という新聞を買い。喫茶店でゆつくり休む。午後二時からもう一度さつきの博物館を見る。ここは入場無料だ。コルネリの地球儀があつた。ヴェネディツヒ一六八五と説明がついている。もちろん日本も出ていてジャポネとイタリア語で書いてある。天球儀もあつたが一つは十八世紀、もう一つには説明がついていなかった。その他コスチュームや先史時代のものなど種々あつた。晩はホテルのレストランで食事をする。このレストランは「アルコール抜き」だつた。別に困りはしないが、ケーベルさんはエッセン・オーネ・トリンケンなんて考えられないと言つたそうだ。しかしたいして呑むわけがなく、ワインを少し呑んで頬をあらめたと久保勉は伝えている。夜はブルクハルトを読んだ。旅先でたまに読書するのも良いものだ。

九月七日 月曜

駅にくつついている郵便局へ行つてはがきを日本へ出す。駅前通りを歩いて行くと、アルペンケイという所があつた。山の方はかすんでいてアルプスは見えなかつた。それからチューリッヒ大学とテヒニツシエ・ホーホシューレが並んでいる所へ行つてみる。地図をみると余り遠くない所にクンスト・ハウスというのがあるので行つてみる。古代ローマに関する特別展が開かれていてミラノやヴエネツィアから借りたものがある。ローマで似たような彫刻を見たような感じがするが無論別物である。バーゼルやチューリッヒもある。常設の方はフランス印象派の諸家のものやもう少し古いところではオランダの画家のものがあつた。モネの水蓮の大作は印象に残つた。四時ごろ館内の寒暖計を見たら二二・五度であつた。

「ラ・スويس」を買つて読む。昨六日ドイツ總選挙の結果、アデナウアーの民主キリスト教派の方が社会主義派より優勢と報じている。フランスはアデナウアーの方を歓迎していると昨日の「ソワール」に出ていた。土曜日(昨日)ギリシアのコリントの近くに地震があつて、コリントの地峡は当分船の航行禁止の由。コリント近辺の人は屋外で夜を過ごしたという。

晩にシュワインスコレットというのを食つた。ひどく脂っこいやつた。昨夜の葡萄は余り旨くなかつたので今日はアイスクリームにした。そのホテルにはラジオがあつている。スイッチを入れたらイタリア語が聞こえて来た。ダイアルを回すとフランス語のアナウンスがあつてドウビツシーの曲が流れて来た。

九月八日火曜

郵便局へ行つて日本へ手紙を出す。ゲスナーストラッセを通つたら薬屋のような店があつたから、字書を引いて覚えたパト・ダンティフリスを呉れというと、コルゲートがいいかと聞き返したので、否スウイスのが欲しいと答える。アルペンケイで「ラ・スويس」を見るとギリシアの地震はまだ余震が続いているという。数日後アテネへ行くのは支障なさそうだ。

晝は宿でウルスト・サラートというのを食う。宿の勘定を済ませる。着いたとき確かに一泊一九フランと聞いたが、勘定書では一八フランだつた。二時宿を立つてバーンホーフにあるスウイス航空へ行く。余っているスウイス・フランをリラに替えてくれるというから二五フラン出したら三五〇リラ呉れた。

飛行機は予定通り一五・三〇に飛び立った。ミラノ着は一六・四五のはずだったが、それより少し前に着いてしまった。空港で二〇ドルをリラに替えて貰う。一二、三〇〇リラ寄越した。一ドルが六一五リラである。すると一円が一・七リラくらいか。

町までバスで一時間たつぷりかかり八　リラ取られた。会社でプリンチペ・工・サヴィアというホテルを紹介してもらう。仲々よい室だった。バスつきで三〇〇〇リラ。食後ちよつと町へ出て郵便局を見つけた。

九月九日水曜

七時少しすぎ起きた。朝食は宿の庭園へ案内されてそこで摂った。八時半ごろ出かけて昨夜みつけた郵便局へ行つたらまだ開いていなかった。地図で見当をつけてドウオーモへ行く。中を見てから千里ラ出して屋上へ上つてみる。一周して下りてからピアツア・デ・スカラの方へ行つてみる。スカラ座を外から眺める。その近くにレオナルドの像がある。それからヴィア・ダンテを通つてピアツアカステロへ出てカステロ・スフォルツェスコを見る。スフォルツア公の城である。

そこを抜けて公園に入り一休みする。さつき買った「フィガロ」は昨日ののだが、ギリシアの地震のことはもう出ていない。公園の向うがポルタ・セムピオーネでアルコがある。パリのカルーセルの門に似ているが、こつちの方が古いのかも知れない。そこから少し歩いた所で郵便局をみつけたので持っている絵はがき数枚を出す。日本へのはがき一枚が航空便で一八　リラだった。

コルソ・マジエンダという通りを歩いてサンタ・マリア・テレ・グラツィエへ行く。お堂の中をちよつと見て、その隣りの博物館になつているレオナルドの「最後の晚餐」の壁画を見る。ここの入場料二〇〇リラ、記念に買った絵はがき三五リラ。

そこを出たら一二時になった。ポルタ・マジエンタで茶を呑んで軽い食事をする。一時間ばかり休んでから、今度はサン・タンブロジオという教会を眺める。古めかしい建物である。次にアムブロジアナ図書館というのへ行つてベアトリチエ・デステを見ようと思つたが、持っていた地図が簡単すぎたのか、道を間違えたのか目的のものが見つからなかった。案内記を出してみるとヴィア・トリノから行くと書いてある。そこでトリノという街を歩いてみたが、やはり見つからなかった。しかしそれは是非見たいと思つたわけではなく、レオナルドを見たこと

で満足したから、もう一度ドウオーモを眺め、そのあたりをぶらぶら歩いて五時ごろ宿へ帰る。

晩は町のレストランへ行つてみようと思つて宿から割合近い所の小さな店へ入る。入口のドアに今晚のメニューが張出されてあるが、それほど通ではないからいきなり入つてスパゲッティその他を食う。細長い棒のようなパンはグラシーノというのだそうだ。

九月一日 木曜

七時に起きる。今朝も朝食は庭園でとる。宿の支払いをする。七八　リラだつた。勘定書にテレフォノというのが二つもあつて、それぞれ六〇となつている。何の電話料だか分からないが面倒だから黙つている。今日はローマへ行つて泊まるのだから飛行場は國內用の小さいもので町から近かつた。タクシーのメーターに二八　と出たから三〇〇渡した。

飛行機は一〇時ミラノ発、一一・四五ごろローマ着。前に泊つたアルベルゴ・ロマーノという宿はイタリア航空事務所のすぐ近くだから、ポーターの少年に荷物を持たせていきなり行つたら満室だといつて断られた。L A Iへ戻つてホテルをきいて貰つたが仲々見つからない。するとポーターの少年がペンションならある、と言つて連れて行つてくれた。アルベルゴというペンションへ泊ることにする。

晝食もここでできるといふから便利だ。二時ごろスカンディナヴィア航空へ行つて二十一日のカイロー東京はウエート・リストドになつているのだがと訊ねると、コペンハーゲンへ問合せるから晩に来てくれとのこと。明日のアテネ行きを調べて貰つたら一四・二五のT W Aがあるので予約する。一二・四〇までにT W Aの事務所へ行くこと。

日本を立つ前稻沼君から、九月上旬ローマで微生物の会議があつて、カイロにいる川喜田君がそれに出席するはずだから、カイロの宿など紹介してもらつて良いい、というアドヴァイスをもらつている。それで会場になつていふ大学の方へ行つてみる。理学部へ行つたら會議事務所が見つかつた。今日は見学か何かで事務所は閉つていたが、日程表が貼り出してあつて、明日の発表の中にオガタという人の名が目についた。人影がないので街へ戻る。

ピアッツァ・デイ・フォンテンの近くにクック旅行社があるから入つてみる。ギリシアの旅行について少し訊ねておこうかと思つたのである。すると日本人が二人で話していた。微生物の會議に來られたのかと聞くとそうだと言う。川喜田さんは来ていますかという、さつきまで一緒にいたんだが、またこれからその宿へ行くのだとのこと。私も川喜田さんに會いたいから同行を頼む。

まだ時間があるので近くの茶店へ案内する。そこはもう何度か休んだことのある店である。二人の日本人は水野傳一君と遠藤元繁君といい私より少し若い人たちであつた。私は科学史の會議のあとぶらぶら歩いているのだと話す。川喜田さんの宿はそこから近い所だつた。初対面のあいさつをすると稲沼くんから連絡があつたそう、カイロへ行つたら自分が宿にしているオテル・デ・ローズを使うようにとのこと、宿へ手紙を出しておくと言つてくれる。

そこを辞去してスカンディナヴィア航空へ行く。リクエストしておいた二日カイロ―東京を確認した。その係の男は寿という字のついた金の指輪をしているので、いい指輪だね、シナのかと言うと、そう父がキャプテンで軍艦に乗つたのでシナで買つて來たとのこと。たいてい係員の名札が出ているのだがそのときは出ていなかったのが名前をきくとデイ・ブラッツァーノという青年であつた。ペンションへ歸つて夕食をとる。ホテルよりも余程よい。いい経験をした。

九月十一日金曜

七時半ごろ起きた。くもつている。九時ごろエール・フランスの事務所をドルをリラに替えてもらう。少し降り出したがかわまずピアッツァ・デセドラの方へ歩いて行く。郵便局が見当らないのでお巡りさんにきいて郵便を出す。それからコロセウムの方へ行く。前に來たときは外から見ただけだったから今日は上つてみようと思う。二階の入口で入場料百五十リラ払う。二階を一周して三階へ上る。三階まで行かれるようになっていゝ。

十一時半ごろペンションへ歸る。晝飯は一時からだといふので、十二時少しすぎ立つ。エレベーターの前で日本人に會つたから微生物の會議かときくとそうだと答えたが、名乗りをあげる暇もなくエレベーターが來たのでさよならをした。TWAの事務所をバスを待っているとき雷雨になつた。一時近くバスが出たころ雨はほとんど止んだ。飛行場へ着いたときまた少し降り出した。

飛行機は三時ごろ飛び立つた。座席は前から二番目の窓際だつたので翼が邪魔

になつて外は余り良く見えない。六時アテネ着。時計を一時間進めて七時にする。少し東へきたわけだ。TWAの事務所で一七日のカイロ行きをきいたら明日返事をするとのこと。宿は少し離れているがリドというホテルを紹介してくれた。ギリシア語のメニューにはまいつたがボーイにきいていい塩梅の食事をした。

九月一二日 土曜

昨夜この宿へ着いたときは夜で分からなかつたが、ここは海岸であるからアテネの南である。ホテルのすぐ前にバス停がある。ここが終点であるからアテネ行はここから出るわけだ。アテナイはギリシア文字でも読むことができる。九時ごろそのバスに乗る。しばらく行くと左手にアクロポリスの丘が見えて来た。やがて街に入りバスが留つたとき乗客はほかに一人もいなくなつていた。はて何処かなと思つたら運転手さんが振返つて「テルマ」と注意して呉れた。さては終点かと思つて降りる。電車賃が千三百ドラクマだからギリシアもたいへんなインフレーションである。

昨夜空港では一〇ドルしか替えてくれなかつたので銀行を見つけて五〇ドルばかりギリシアの金に替える。次に郵便を出したいと思つてお巡りさんにきいたが通じない。少し歩いていると郵便ポストがあつた。手紙を入れようとしている人がいたから、切手はどこで賣つていますかと訊ねたらこの中だという。入つてみると大きなホテルだったが、その一角で切手を売つていた。日本への航空便が七千ドラクマだという。

丘の方へ行こうと思つて歩いていたら風の塔へ出たので暫らく眺める。それからパルテノンへ行く。案内書「ギード・ブルー」には入場無料と書いてあつたが千三百ドラクマ取られた。修理などしているようだから無理もない。エレクティオンというのは仲々良い。丘の南の方から下を見ると野外劇場が見える。北側へ回ると下にさつき側を通つて来た風の塔が見える。しばらく丘の上を歩き、それからテセイオンを見る。

十二時になつたので下りて憲法廣場という賑やかなところで喫茶店に入り菓子など食う。するとフィリップンかと言つて話しかけて来た男がいた。捕虜で福岡にいたことがあるそうで、スキヤキなどの日本語を知つていた。そのあともう一人話しかけて来た男がいた。ここはもうヨーロッパではなくアジアなのだ。コーヒーもフランスでいうカフェ・テュルクで、こさずに上澄みを呑むあれだ。

それから聖ゲオルギオスという丘へ登つてみる。余り人は居らず、唯一人だけ見かけた。上に教会があつて其処へ行つておまいりをするのだと言つていた。私はそこまで行かず町の眺望を楽しんだのち下りることにした。途中サボテンに実がなつていた。イスラエルでもこういう光景を見て来た。

TWAの事務所へ行つて昨日頼んでおいたカイロ行の座席をきいたら十七日のが取れた。それからクック社へ行つてワゴン・リのことをきく。火水(一五・一六)一泊二日コリントを越えてアルゴスからナウプリオンへ行く座席を予約する。十二ドルであつた。それから公園へ入つてみる。木がよく繁つている。寒暖計があつたので見ると二六・五度であつた。時刻は四時半であつた。

帰りはエダムと書いてあるバスへ乗ればよいのだ。今朝は時間のことを考えなかつたが終点まで二五分くらいである。宿へ帰つて風呂に入る。少しぬるかつたが、さつぱりした。

九月一三日 日曜

九時半バスで町へ行く。地図をみながら国立ベナキ博物館へ行く。アシエツ社の案内書には室数がかなり多いように書いてあるが八室くらい見たら終つてしまつた。館員に訊ねたらこれで全部だという。目録を手にとつてみると一九三五年版で蠅の糞でもついたのか汚れたのが一つだけあつた。やめようかと思つたが後日の参考のため買つておく。

十一時そこを出る。正面は国立公園である。そこを通り過ぎてゼウスの神殿へ行つてみる。柱が一本倒れたのがある。一本の柱は十四乃至十五箇の石を積ねてできている。それぞれの厚さは一定していないようだが、全体の長さは正確に定つているようである。

公園前でサンドウィッチを買い公園のベンチで食つていたら、キナかと言う男がいたが面倒だから相手にせず。やがて空がくもつて雨が来そうになつたのでバスに乗りエダムへ帰る。

ホテルで茶を呑みペランダで博物館の目録を見てみると、垣根の外からジプシイの女だというのが英語でカルタ占いをしてやるという。いらないと答えたが小銭をやつた。それでも立去らずカルタを一枚とれというから一枚とるとダイヤのクインだつた。ここへおかねを置けという。さつきやつたじゃないかと言うと、

あれは煙草一本だ、もつと置けという。かわいそうだからもう少しやつて、さよならをし、占いはして貰わなかつた。

さつき買ったのは「アテネの博物館(複数)」という英語版で、ベナキ博物館のことだけでなく、ビザンティン博物館などのも載っている。これは見ておく必要がある。今日見たものの中に稲妻のゼウスというのがあつた。解説書によると一九二九年にエウボエアで発見された由。腕は折れていたのをついだらしい。つぎ方はカラマノスという人が指導したとある。国立考古博物館は修理をしている様で、正面からでなく、横のポリテクニオンの方から入つた。

今日は昨日よりだいぶ涼しい。ホテルへ帰つて休んでいるとき果して雨が降つて来た。しかしにわか雨だからぢきに止んだ。今日の午後はギリシア美術史の勉強をした。夕食にはギリシア語のメニューを読もうとする程の元気が出て来た。マカロニアは当然スパゲッティ、カルポージといつたら西瓜を持つて来た、エトセトラ。

初めてこの宿へ着いたとき、此処は何という所かときいたらカバンなどへ貼るレッテルをくれた。それにはラテン字で、オテル・リド、パレオン、ファリロン、グレースとあつた。番地をきいたら六七という。今夜部屋に貼つてある何やら注意書のようなものを見ていたら、リドというのはギリシア文字ではリントとつづるらしい。



一九五三

九月十四日 月曜

十時ごろ宿を出て今日はビザンチン博物館へ行くことにする。地図で見当をつけて行ったらすぐ分った。キリスト教関係のものばかりだが、彫刻には彫りの深いものがある。これが特徴かも知れない。出口でベナキ博物館を尋ねたらアメリカ大使館の向側ということで、すぐに分った。ここは少しげてものの感じがして種々のものがある。刀剣、ピストル、鉄砲、それから耳環などの装飾品、また服装の模型は面白かった。テッサロニカ、キクラデス、クレタなど。装飾品には金を使った精巧なものがあつた。それからペルシアの織物、クレタのレースなど。時代はいつごろのものか、概ねこの博物館は解説が不十分である。

そこを出て喫茶店でコーヒーを呑む。例のカフェ、チュルクだ、これしかないのである。ティーをきいたら無いとのこと。靴みがきの少年が入って来たので磨いてもらう。この町を歩くと靴にほこりが着くのである。

憲法廣場の近くに本屋があつたから行ってみたら八 一二、五 九と書いてある。もう十二時をだいぶ過ぎているから、午後五時まで待たないと開かないわけだ。アテネの晝休みはずいぶん長いものだ。アテネの町を小高い所から見るとイスラエルの景観に近い。周りの山は赤茶けていて木が少なくてひからびた感じだ。それでもアテネの方が木が少し多い。町の家は白い壁で屋根は明るいたいしや色が多い。

夕方早く宿へ帰り、明日行くコリント、エレウシス、ナウプリオンの案内記など読む。

九月十五日 火曜

朝食を早くするように頼んでおいたので、七・一五のバスに乗り七・四五キング・ジヨージ・ホテルの前へ着いた。クック社のバスは八時きっかりに発車した。間もなくダフネ着、古い教会を見る。堂内の絵は十三世紀に修復したものである。そこから少し行ったところがエレウシスで大きな廃きよである。丘の上の博物館

を一巡した。彫刻が主であった。

次はコリント、神殿跡に七本の石柱が立っている。それは一つ石でライムストーンとのこと、ここにも博物館がある。それからミケネへ向う。町へ入る前に小亭でランチ。イギリスの学生とアイルランドだという二人連れとで食卓につくことになり、あつとこのメンバーで食事をする。

それからミケネの遺跡を見る。ライオンの門、墓、シユリーマンがアガメムノンの墓と断定したもの、その他みんなで六つあるよし。この辺の石は礫岩である。ミケネには博物館はない。強いて言えば遺跡全体が壮大な博物館である。

それからアルゴスを通って六時ごろナウプリオンへ着いた。ここで泊りである。二人づつ一部屋へ入るようだったが、黙って待っていたら二人室へ一人で入ることになった。モーターの音のする悪い室だがこれで結構だ。外にシャワーがあるから使えといったが、それほど暑くないから使わなかった。

晝食のときと同じメンバーで丸卓子についた。だいぶ話をした。食事は旅行社のあてがいぶちだが呑物は自分もちである。イギリスの学生にワインを振舞ったから喜んでいた。アイルランド氏がいつも呑むかときいたら、祝いのときだけ、高いのでね、と答えていた。

ナウプリオンには萬里の長城を思わせるような、しかしそれよりも小規模な城砦がある。アシェット社の案内書にはパラメードの要塞と書いてある。今日見たアガメムノンの墓と称するものの中は石を組合せて作ったキューポラになっている。直径が十五メートルあると説明していた。その外で近い所に岩屋があった。

九月十六日 水曜

八時朝食、八時半出発となっていたので七時ごろ起きる。定刻出発。一時間くらいでエビダウルス着。大きな野外劇場を見る。音響効果が良いという説明があったので、われわれは試してみることにした。石の段は五四ある。三〇くらいの所に巾二メートルばかりの中段がある。イギリスの青年が舞台の眞中でしゃべるのが一番上の段で私は聞いていた。アイルランドの青年がベデカをぱたと閉ぢる音まで聞きとれた。

そこから少し下ったところにある博物館を見る。繪はがきを買い、記念のため

ギリシア語のナウプリオン案内を買い、それを見ていたらスウイス人だという男が話かけて来た。何処から来たのか聞いたらパリからと言う。この男がいちぢくを進めるので御馳走になる。甘くて旨かった。

それから車で少し走ったところでテイリントの遺跡というのを見る。一時ごろ昨日泊ったホテルへ戻りここで晝食。晝休みをして三時半出発、帰路につく。帰りには説明は要らないので案内嬢はここへ残って仕事らしい。考えてみると彼女たちはわれわれの同業者である。考古学者の説明によりますと……というような説明をするのだが、教師も同じことでディラックの理論では……などと平気でしゃべっているわけだ。愛すべき同業者に別れを告げてバス上の人となる。

帰りはコリントの新市街で十五分ばかり休憩しただけでアテネへ直行した。アテネへ着いたのは七時半であったから、四時間かかったわけだ。途中でギリシアの汽車を見た。バスの中でフランス語を話す青年が「エキस्प्रेस」などと皮肉を言っていた。ギリシアの松は日本のと異なつて黄色を含んだ緑である。枝ぶりもイタリヤで見たのに近いのは当たり前であろう。

八時リドー・ホテルへ戻る。七日か八日の月が出ていた。二日の旅行はなかなか良かった。三回食卓を共にしたイギリスの学生とアイルランドの青年も好運な巡り合わせであつた。アイルランド氏はモダン・グリークを勉強して来ているので感心した。

九月十七日 木曜

今夜カイロへ立つので今日は宿で夕方まで休養することにした。一昨日と昨日とかなり肉の入った食事をしたので今日は朝食ぬきにしてゆっくり寝た。晝はスパゲッティとメロンだけにしておく。

六時宿を出て飛行場へ行く。八時発の予定だったが三十分ばかり遅れて出航。しばらく飛んでから燈火がたくさん見えて来たのでアレクサンドリアだろうと思つた。程なくカイロへ着いた。現地時間で十二時であつたから時計を四五分進める。パスポートの検査などすべて緩慢で町のTWAの事務所へ着いたときは一時をかなり過ぎていた。オテル・デ・ローズへ行つてドクター・カワキタに頼んでおいた者だと言うと、承わっておりますとばかり、すぐに室へ案内してくれた。

九月十八日 金曜

七時ごろ起きる。八時朝食をとり、ナシヨナル・バンクの町名をきいて町へ出る。エル・ニルときいてカイロへ来たなと思う。本屋で地図を買い、エル・ニル街を教えて貰う。ナシヨナル・バンクはすぐに分った。ギリシアの金を当地の金に替えてもらおうと思つたら、それはアテネ国立銀行だという。それもすぐ近くであつた。六五万ドラクマで六ポンドながしか呉れたから、一万ドラクマでエジプト・ポンドというわけだ。

地図を見て国立博物館へ行く。アラビアのだらりとした服を着た男が寄つて来て案内をしようという。すげなく断るのも気の毒のような気がしたので頼むことにした。英語とフランス語のちゃんぼんで説明する。博物館を終るとシターデル（城砦）へ行かないかというから行くことにした。大きなモスクがあつて大勢の人が礼拝をしていた。晝の礼拝であろう。モスクの庭からギザのピラミドが三つ見えた。サツカラの段のあるピラミドも遠くに見えた。

次にバザールへ行く。ここは案内人連れて来て良かった。独りでは歩けないところだ。種々の土産物を賣る店がある。とうとう香料を賣る店へ連れこまれた。ジャスミンの小瓶を一つ買うことになる。一ポンドだが、三箇なら二ポンド半にしておくと言う。香料店でアラブ式コーヒーを呑む。車で宿まで帰り、午後ギザのピラミドへ案内すると言うから二ポンドで頼むことにする。

三時の約束だから玄関へ出ると案内人はちゃんと待っていた。車に乗りナイル渡つて動物園の脇を通りピラミドへ着く。馬に乗るか、ラクダに乗るかというのでラクダに乗りスフィンクスの傍まで行く。そこで下りて古代の墓所らしきものを見る。次はピラミドの中へ入る、坂になつた道ができてゐる。かなりすすんだところに広い場所があつて王妃の墓所という。もつと高い所が王の墓だというので其処まで登る。そこがピラミドの高さの丁度半分という。一番大きいピラミドの高さは一五〇メートル。

さつき乗つて来た自動車が五時にさつきの場所へ来るように約束しておいたので、それに乗つて宿へ帰る。案内人はギザの近くに住んでいるそうで、少し乗つたところで下りた。明日サツカラへ案内しましょうと言うから、それはきつぱり断つた。彼は公認の腕章をつけた案内人だが、油断はできない。初めの約束のほかにだいが取られた。

九月十九日 土曜

昨日牛肉の脂のところを残せばよかったのに皆食べてしまった。そのせいか腹具合が良くない。疲れも少したまったのかもしれない。朝食はぬいて寝ている。しかし十時ごろ銀行へ行って金を替えてもらう。ついでにスカンディナヴィア航空へ行って時間を確かめておく。荷物は明晩五時半までに当事務所へ持つて来ること、本人は明晩の一時半（正確に二十一日一時半）に来ること。

そこを出て宿へ帰ろうとすると、青年が近づいて来て昨日ピラミドでお見かけしましたと言う。案内でもしようというのかと思つたら、ガイドじゃない学生だが。見物のお手伝いをしようという。やっぱりもぐりのガイドじゃないか。要らないことわる。私がアシエツト社の案内書を持つているのを見て、それが分かるのかと抜かしやがった。断られたのがくやしかったのだろう。

宿へ帰り晝食ぬきで休息。晩はスパゲッティ、サラダ・菓物を食べる。

九月二十日 日曜

腹具合はよくなつた。朝食はちゃんと食べられた。これで歩けるだろう。今日はアラブの博物館を見に行く。中にいた男が説明をしたまではよかったが金をくれという。あいにく小銭の持合せがなかったので切符売場で細かくして貰い、どのくらいやったものか相談したら五ピアスターもやればいい、というのでそれだけ渡してさつさと出てしまう。

それからエジプトの博物館をもう一度、今度はひとりで心ゆくまで眺め、目録も買う。出たところで先日の案内人が自分を見つけ近づいて来たからグドバイと言ってやる。

宿へ帰つたら川喜田氏に會えた。午後サッカーへ行く積りだというと、公使の息子が近く寄宿舎へ入るので、その前にサッカーを見たいと言っていたから、電話で都合をきいて一緒に行きましょうとのこと。公使館へ立寄つて三人で行くことになる。公使は与謝野秀氏、坊っちゃん、馨ちゃんという。ソリマン・パシャで拾ったタクシーはサッカーを知らないというので、ピラミドの近くで別の車に乗つたが、その運転手も行ったことがないらしく、途中でアラブ人にきいたりしてサッカーに着いた。段のあるピラミドを眺める、墓を三つ見る。すばらしい壁画がある。まだ図録が出来ていないのもあるらしい。

やがて夕方になって来た。砂漠に日が沈むのを見た。帰りにメンフィスの遺跡

を通った。ラムセス二世の大きな石像が地上に横たわっていた。近くにアラバスターのスフィンクスともう一つ何かの像があった。遺物はこれだけらしい。公使館へ寄つて公使夫妻にあいさつをする。ご馳走になる。川喜田氏と一緒に宿へ帰り、自分は今夜おそく立つからと言つてお礼とお別れの言葉を述べる。十二時ごろまで宿で休息し、それから航空会社の待合所へ向つた。

九月二十一日 月曜

一時三〇分バスが来て飛行場に向う。飛行場へ着いたら三十分くらいおくれるという。エジプトの紙幣と小銭が残っているので、繪はがきや紙ナイフなどの土産物を買つてエジプトのかねをエジプトに返した。銅貨がまだ少し残っていると言つと賣店の人が、スーヴニルにお持ちなさいという。

飛行機に乗り込んだのは四時ごろであつた。四時十五分ごろ飛び立つ。隣の座席はあいていた。眠ろうとしたが、眠れなかつた。一時間くらい経つたかと思ふころ外を見たら明るくなつていた。窓際の席だったので下を見ると紅海であつたが、たちまち渡つてしまつた。狭いものである。アラビア半島の砂漠の上を飛ぶ。眞直ぐな自動車道のような、あるいは城壁のようにも見える線が走っている。あれはパイプラインであろうか。道路らしいものもつと屈曲したのがある。アラビア砂漠の地形がよく見える。ワーデイ即ち涸河も認められる。

それからずっと眠つたらしい。カラチへ着いたのは現地時間の午後四時半であつた。そこで約一時間休む。東へ帰るときは次々に時計を進めなければならぬ。

九月二十二日 火曜

月が沈むころラングーン着。カラチから乗つたドイツ人が隣りの席へ腰をかけたので、この人と話をする。東京へ行くそうである。ラングーンから一時間半くらいでバンコク着。朝の七時ごろのようであつた。ここで朝食になつた。あとは東京まで止まらずで十二時間かかるという。夕方まで眠る。

夕方六時ごろ今ミヤコ島を通過しましたと案内嬢が言いに来た。それから間もなく点々と島が見えて来た。下の方の薄雲の中に虹が立っている。今夜は月がまんまるだ。十時無事羽田に着いた。

あとがき

一九五三年八月学会のためイスラエルへ行った。これは公務出張であったから、会議が終わったら直ぐ帰国するのが本筋であるが、少し足を伸ばせばギリシアとエジプトという古い文明の地があるから、アテネとカイロだけでも一目見ておきたいと思ひ、私費旅行を追加してもらったのである。しかし南国の入園査証を日本で貰う暇がなかったので、それはパリで貰うことにした。パリへ行った理由はもう一つある。イスラエルの学会にはドイツの学者が来ていないので、誰か科学史の学者に合いたいと思ひ、その連絡もパリで取りたいと思つたのであつた。マインツまで行くには行つたが、夏休みのため誰にも合えなかつたが、それが切つかけとなつて文通の道が開けた。一つハブニングがあつたのは、イスラエルの学会を終つて西へ向おうとしたとき、パリで交通関係のストライキが起つたということで、容子を見るためイタリヤからスウイスへ入つて二三日を送り、アルプスの氷河を見ることができた。ドイツからの帰りにチューリッヒに降りてアインシュタインを偲んだり、ミラノでレオナルドの「最後の晚餐」を見るなど道草を食ひながら懂がれのアテネに着いて数日を送つた。それからカイロへ渡りここでまた数日の見学をしたげである。

この部分は全く私的な日記であるから日記帖のまま蔵つてあつたが、前の「イスラエル日記」が東でなく西へ向つて飛び立つ所で終つていたので、尻切れとんぼのようだから、そのつづきも「ももんが」なら載せてもらえと思ひ今岡原稿用紙に書き写したので、そのさい多少取捨選択して体裁を整えたつもりである。長い間紙面を提供して下さつたことを「ももんが」の皆様に感謝する。

なおイスラエルを含む一九五三年の旅行について当時新聞や雑誌に発表した文とラジオ放送に次の五編がある。(一九九〇年八月)

- エルサレム便り 「読書新聞」 一九五三・八・二四
- エルサレムを訪ねて 「東京理科大学新聞」 一九五三・一一・一
- イスラエルの印象 「文化放送」 一九五三・一二・二八
- ペールシュバの旅 「旅」 一九五四・一
- アルゴスの旅 「東京理科大学新聞」 一九五四・六・二五

追記 「道草日記」の初めの方の八月二十日の条で、ジュネーヴで雷鳴をきいてシラー（日記では古風にシルレルと書いた）の「ウィルヘルム・テル」の一場面を思い出している。そうして短い引用をなし、昔教科書で習つたのだから間違いない、と自信のありそうなことをかいている。今度活字になつたのを読み返してみて、引用はあれで良かったのかどうか、疑問に思われて来た。

手もとにテキストがないのでシラー全集の該当する部分を借りて来て当てると、やはり間違つていた。あそこは *Es donnernd e Hben, ... (Schillers Werke*、

Nationalausgabe, Weimar, 1980, X, 132)で動詞が単数でなく複数であった。ま

た「高い所で」という部分が抜けていた。記憶というものは当てにならないものである。しかし山の上で雪が鳴っているという情景ははっきり覚えていたので、たまたまそういう情景に接して、「テル」の一場面が思い出されたので、全くの虚構ではないのである。

引用の箇所は第一幕第一場の初めの方である。舞台はフィアワルトシュテッテンゼーの湖畔で、背景には高い山々が連っている。初めに漁師の子供が小舟の中でうたう歌があつて、次に牧人の歌、その次に岩山の上で狩人のうたう歌の冒頭が引用の所である。

私は一九二二年から二三年にかけて、高等学校三年のとき岩元さんからこれを習った。岩元さんには一年のとき文法で脂をしぼられたので、こわい先生であることは良く分かつていた。「ウイルヘルム・テル」を習った最初の日のことは忘れられないほど鮮明に記憶している。先生は前の方にいる生徒に「君、ナイフを貸して呉れ給え」と言つてナイフを借り、レクラム本のページを切つて、それからおもむろに「漁師の子供が小舟の中でうたう」というように始めたのである。

私は何と気障なことをする人だろうと当時思った。芥川龍之介は大学を出て間もないころ海軍機関学校であつたかで英語の先生をしていたそうだが、ある日下読みせず教室に臨む破目になつたことがあつて、そのときの感想をあらしの海へボートを乗出すような気持であつたと書いてある。若い教師ならこれが本音であろう。岩元さんほあのころもう劫を経た大先生であつたから、シラーなど下読みせずに講義できるほど博識だつたらうか。五十年ぶりにシラーを読み返してみても、この疑問はまだ氷解したとは言えない。

(一九九一年八月五日)



大正十四年九月、田端の大龍寺で子規忌アララギ歌會があつた。私はこのとき初めて歌會というものに出席した。アララギに入會したのはその前年で、赤彦先生の面會日にはたいてい出ていたから、そこで同席した人はいたはずだが、まだ顔見知りはできていなかった。座に東大の帽子を持った男がいたから、よろしくと言ったら森本治吉君であつた。彼はもう一番前の一段組に出ていたから名前を知っていたのである。

やがて會が始まり、まず子規の墓に詣で、それから歌評になつた。選者として上座に坐つておられるのが土屋文明先生と分つた。末座の方にいたのでお顔はよく見えなかつたが、あの透き通るようなお声を聞くことができた。歌を読みあげる役は、もう少しあとで分かつたのだが辻村直さんであつた。

やがて私の歌が読まれた。そのとき出した歌をどういふわけか今でも思い出出すことができるが、こゝへ書く勇氣はない。歌會に行く途中ででつちあげたもので、尾花の先に赤とんぼがとまつていて、夕方になつて風が寒くなつて来たというふうなもので、おまけに秋という言葉まで入つていた。道具立てが多過ぎるね、と土屋先生から一言いわれて、なるほどそうかと思つたのである。

これを切っかけにしてそれから歌會に出るようになり、知り合いも出来るようになった。山口茂吉君はその最初の一人である。またアララギ発行所へ校正や発送の手伝いにも行くようになり、高田浪吉、藤沢古實などの先輩やその他の諸君をも知るようになった。

大正十五年三月末、島木赤彦先生がお亡くなりになつた。それから暫らく経つたある日、山口茂吉君が君はどうするんだ、と尋ねるので私は即座に土屋先生にお願いするつもりだと答えた。すると山口君がそれじゃお願ひなくては駄目だ、これから行こうと言うのでついて行くことにした。下落合の先生のお宅へ着いたのは夕方であつたが、先生はお留守であつたので奥様によるしくお伝え下さいと言つて辞去した。それからしばらく経つたある日、発行所で土屋先生のお目にとまり、先生の方から矢島君せんだつて家へ来てくれたそつだね、と言われたので、

よろしくお願いしますと言って頭を下げた。これをお願いのことは完了したのである。

それから土屋先生の選の所に歌が載るようになった。また暫らく経ったとき山口君が今度君の歌は一段組だぞと教えてくれた。彼は私などとは比較にならないほどひんぱんに発行所へ出入りしている情報通であった。一段組に乗せてもらえるのは有難いことで、それにはげまされたりもして、毎月歌を少しでも出していた。しかし多くは作れないたちで誠に貧弱なものであった。

また一方で、赤彦先生から二つ(物理と歌)やるのはむずかしいぞと言われたのを時に思い出し、専門の勉強をしなくてはならないとも思った。私は大正十五年にとどうやら卒業し、工学部の方であったが講師にしてもらったので、なおさらなまけていては申し訳ないのであった。そんな訳で昭和六年ごろから作歌がほとんど無くなった。それでもアララギの會合には出ていた。

講師でも東大構内のいわゆる山上御殿と呼ばれた集会所を借りることができるので、あそこでアララギ歌會を開いたことがある。世話役は犬丸秀穂君で、彼が発案者だったのだろう。土屋先生が出席して下さった。学生では医科の出月三郎(アララギでは小松三郎)君がいたが、その他の諸君は記憶していない。山上會議室はあまり居心地がよくないので、本郷三丁目の明治製菓の二階の喫茶室へ會場を移した。このときも土屋先生が出て下さった。また篠遠喜人さんが見えて隣合せに坐ったのを覚えている。篠遠さんも先年亡くなってしまった。

昭和十六年に私は京城大学へ理工学部が新設されたのへ赴任することになった。その前に齋藤先生と土屋先生へごあいさつに伺った。土屋先生がいつ立つのかと言われるので日時を申し上げたら、東京駅まで来られたので、アララギの知合いがびっくりしていた。先生は京城に守永さんという女性の會員で世話好きの人がいるから、女中を雇うなど守永さんに頼むとよいとおっしゃったので、その通りにした。また京城へ行ってからのことであるが、大学と隣り合ったところにある医学専門学校でたしか生理学を教えている大塚九二生さんという人がいたので、訪ねて行って知り合いになった。

昭和十九年に文壇の人が何人も軍属として北支へ出掛けた。土屋先生も正式には何という資格であったか、とにかく北支へ行かれて、帰りに京城へ寄るといっ情報をお大塚さんから貰った。通知を受けたその日時に京城駅に行ったら先生は三

等車から降りて来られた。私に向って小林勇が二等車にいるから會つてやり給えと言われるので、二等車へ入って行くと小林君がいた。彼は暖かそうな外套にくるまっついて、土屋先生からきいたと言ったら何だかきまり悪そうに私には思われた。幸い停車時間は短かいから私はすぐに二等車から降りた。

先生の宿は大塚さんたちが用意したのであるが、数人のアララギの仲間たちと私もお伴をした。京城大学が管理している何とか文庫に朝鮮の古い書物を収蔵しているので、おもてなしになるうかと其処を見せて貰うようにしておいて、翌日だったが、それを申上げたら暫く考えておられたが、止めておこうと言われた。

京城へは二泊くらいされたかと思う。アララギの會員が集まって来て、先生に何か書いて貰うことになる。色紙や画用紙に何枚かお書きになってから、五味君や矢鳥君は色紙を書いてくれなんて言わないからな、とおっしゃりながら「ほこり立て羊群うつる草原あり黄河の方はやや低く見ゆ」と書いて私に下さった。私はすぐに「かたむける麓の原の村二つ家立ちひくく土につきたり」という『ふゆくさ』にある富士見高原の歌を連想した。また私は、「ほこり立てヨウゲンうつるソウゲンに」と音で読んでいたが、引揚げて来てから頂戴した『葎菁集』をみるとそれぞれ羊群、草原と訓みがついている。何れにしる実に新鮮な感覚であると思う。

京城から引揚げて来てから、また土屋先生にお會する機會ができた。昭和二十一年の何月であつたか、牛込の旧陸軍病院でアララギの集まりがあつた。何十人か来たように思う。土屋先生が出席されたのである。そのとき『葎菁集』を頂戴したと記憶する。これは七月の発行であり、夏か初秋のころだったのである。

昭和二十二年に石原純先生が亡くなった。早くアララギを離れたとはいへ、伊藤左千夫の弟子であり、歌集『鬩日』は前から定っていたことはいえアララギ叢書になつている人であるから、アララギに一言もその死について記事がないのは良くないと思い、私は「石原純先生」という原稿用紙五枚くらいの文を書いて五味保義さんへ提出した。五味さんから土屋先生があれで良いと言われたということで、それは「アララギ」十月号の巻末六号記事の中に印刷された。

それからだいぶ経つて一九八一年(戦後の記憶は西暦によつて)に科学史の若い仲間が石原純研究を始めていて私にも相談があつたので、石原純の科学以外の活動の調査を引受けた。それは歌とエッセーの分野である。石原純は『鬩日』(大

正十一年）を出してからは定型を捨てていわゆる新短歌なるものを作った。そうして幾つかの雑誌を主宰したので作品が散在している。その中の五十数首を集めて『ももんが』に載せたので、土屋先生にはお送りした。また歌論とエッセーについても同誌に報告を書いた。しかしこれらのものを先生はみて下さったのか聞くことはなかった。

歌の方では私は極めて怠惰な生徒であったが、土屋先生の知遇を得たことは私にとって忘れることのできない幸いであった。

（一九九〇・一一・一五）

付記 土屋先生がお亡くなりになったとき、ご遺志により葬儀はおこなわず、後日アララギの方で偲ぶ會を催すことが報じられた。腑甲斐ないことだが私は近ごろ視力も脚も弱くなつて、独り歩きはつつしんでいるので、ご葬儀があつても行かれそうもないし、偲ぶ會も同様である。そこで取敢ずこの一文を草して哀悼の意を表したのである。これはそのまま蔵っておけばよいのだが、田中君が好きなことを書けと言ってくれるので送ることにしたのである。これを書きながら思い出したことがあるので付け加えておきたい。

一九八九年二月一〇日の朝日新聞の夕刊の「余白を語る」という欄で「土屋文明さん（歌人）」と題するインタビュー記事を載せている。その中に「私がふつうの中産階級の出だつたら、物理関係の学校へ進んだと思いますよ」という先生の言葉がある。これには電気に打たれたような衝撃を受けた。もし先生が物理の方へ進まれていたら……。最近刊行された歌集『青南後集以後』を拝見すると、人々にたすけられて生きて来た、ということが何度も歌われている。私は先生の生國のとなりの下つ毛の貧農の家に生れ、人に助けられて大学まで行ったので、先生のこの言葉には格別の感動を覚えたのである。

（一九九一・八・一三）

『ももんが』一九九一年十月号

(田中隆尚氏への礼状)

「道草日記」の中のアテネの博物館のところを現地の知識に基づいて丁寧にチェックして載き有難うございました。八月号、九月十三日の初めの方に出て来るのは矢張り国立博物館であります。当時持っていたアシエツト社の案内書を出して見ると、パティツシア通りに面して工科大学と隣り合った所です。それから五行ほどあとに行を改めて「十一時そこを出る。正面は国立公園である」書いたのがいけなかつたので、そのため国立公園に面したベナキ博物館とお思いになったのは無理ありません。念のため日記帖を出して見ると「十一時外へ出る。正面が公園になっている」とあり、国立公園とは書いてありません。それを淨書するとき国立公園と書いてしまったのは、筆者の頭の中にベナキ博物館を出たところが国立公園だったというイメージが浮かんで来てこうなったのかと思います。アシエツトのアテネ市街図を見ると「ミュゼー・ナシオナル」と記した一部は木立に囲まれていて、その奥つまり通りから遠い方に建物があるようになっていきます。この木立を公園と思っただと思います。この案内記は一九三五年版で、一九四八年の追加が赤紙で補足させ大ものですが、大勢は変わっていません。

同じ日付のもう少し行った所にかかるのも同じ国立博物館で、横のポリテクニオンの方から入った」というのがアシエツトの市街図とも合致します。ポリテクニオンはさきほど工科大学と書いたもので、アシエツトでは「エコール・ポリテクニク」となっています。考古博物館というのは日記にはありません。

九月号の九月十四日に出て来るベナキ博物館はその通りで、蛇足ですが日記にも出てる *The Museums of Athens* (Athens, 1935) の二三ページにベナキという人が自分のコレクションに逗留費を添えて國に寄贈したものと、従って國のものですが国立という言葉は入っていないようです。アシエツトの地図にも単にミュゼー・ベナキとなっていて、通りを隔てて国立公園(ジャルダン・ナシオナル)があり、その一角が旧王宮となっています。日記には書いてありませんが、私はこのベナキ側でなく西の方の入口からこの公園に入りましたが、帰りに出た所は入った所と異っているので戸惑い、いかめしい制服を着た番人にきいて、これがベナキ側の入口であることが分かりました。ピザンチン博物館は今地図を見ると其処から東の方へ少し行った右側で、そのあたりはリュケイオンとなっているか

ら昔アリストテレスの学苑はそのあたりにあったのでしょうか。よけいなことを書くとまた面倒なことになりかねないので止めますが、おかげでアテネの患い出をあらたにしました。

(一九九一・九・二七)

『ももんが』一九九一年二月号

(藤井菊枝『うすらづき』批評特輯号)

歌手うすらづき有難うございます。この前はてつきり歌集と思い込み包をあけてみたら文集でがっかりしたとか、この次は歌集お願いしますなど不躰なことを書きましたが、この度その願いがかなえられたので直ぐに読んでしまいました。あんなことを申しましたのはももんがで歌を拝見してきましたからです。雑誌でご文章を拝見した記憶はありませんでした。いつも拝見しているお歌はおおらかでしあわせなお方だという印象を受けていました。勿論生老と病死は人生につきものですが。歌を作る人はしあわせだと思います。思をのべることは精神衛生によいことです。ところで歌集を読んで行くとお祖父様が高崎藩に仕えたお方でお母さまが山本勘助の血すじとか、おおらかさの一端がわかったような気がします。日本舞踊もお似あいと思います。踊りの歌数首の中では「舞の手の調べにあはせくりかえす心はこりて松の縁を」(一五六)が好きです。音調がよろしい。

いつもお歌を読んで感ずるのは私などが若いとき習った流派と親近性があるように思えるからでしょう。しかしこの度もももんが以前の作も拝見して仲々ロマンチックな歌もあると思いました。傷負へる獣のごとく山に来て若葉をしとねにねむらむとおもふ」(一六二)、これもももんが時代でしたが)はかつての明星の中においてもおおかしくはないような気がします。

一巻を通じて最も感銘を受けたのは「みどり児の孫を抱けばほのぼのと腕にのこる亡き子の感触」(一一一)でした。もう十数年前孫娘が小学校へ入るので何がいかときくと鳩時計がいいというので手を引いてデパートへ行きましたが、昭和十二年の六歳で亡くなった娘が思い出されて何とも複雑な思いがしました。そのせいでこの歌が心にひびいたのかも知れませんが、佳作にちがいありません。テクニクの上でおもしろいと思ったのは、形容詞の副詞的用法とでも言うべきものです。「しめきれる障子開くれれば薄暗にフリージャの花白く匂へり」(四一)は文法的には匂うを形容している副詞ですが、意味合はフリージャが白くて、そうして匂っているのが自然に無理なくおもしろい表現となっています。一首において、「風渡ればたまゆら白き鈴の如ゆるる目をひくどうだんの花」の白き鈴も鈴が白いのではなくどうだんの方です。総べてお歌には「白」が目立ちます。これは私が石原純の歌の「黒」を意識しているせいかも知れませんが、小見出しに「白き焰」

(二五二)を見たときにはこれは象徴的だ、五十年前の先生が汝は詩人と言われたそうだが、その先生は先見の明がおりだったと一瞬思いましたが、誰か八つ手の花をそう呼んだそうでオリジナルでないことが分かりました。「白」でもう一つ、「白鳥の歌」という題名を見たとき、おやと思いました。フランス語で白鳥の歌と申しますと最期の歌、文章なら絶筆となりますから。然し日本語ではそういう意味はありませんから、これは全くの思い過しでした。

まだ感想はありますが長くなるのでここまでにします。以上は昨日の一気に読んだ印象をそのまま書いたものです。

一九八八(ノーモア元年)・一〇・一七

昨日は用箋が尽きたところで止めましたので、続きをもう少し書きます。その前に一つ修正があります。四ページの「フリージャの花しろく匂へり」について「しろく匂へり」に興味を覚え形容詞の副詞的用法などと大げさな言葉を用いたので、もしこれが「しろく匂へり」だったら平凡です。そこまではよかったです。調子づいて一首おいて次の歌の上の句の「白き」が下の句の「どうだん」を形容しているかのようにとったのは勇み足で、これは白い鈴に見えるでした。白が目につくことを申しましたが一枚めくった「血を吐きし…」は赤が出て来て而も人間くさいのですが「ひとありて」だから若き日の感傷かも知れませぬ。人間くさいと言えば五五「世論」の初めの二つは注目すべき作品と思います。時代を超えた花や鳥の歌もよいがもう一つ学徒出陣を含めた歌は日本の歴史に残る事ですから、歌の作品として記録されてしかるべきものと思います。敢て社会派の歌をよしとするではありませんが、人間くさい作品ではこの三首をあげたいと思います。

最期に近いところに井口きちが現れますが上州では良く記録されているでしょうが、若い人には注釈がないと分からないのではないのでしょうか。「武尊の麓」を読んだ人はもう少しないでしょう。あれは確か遺歌集である人の場合は歌だけでは救われない程深刻でした。

十月十八日追記

ホタカのきは井口ではなく江口だったでしょうか。一高へ入ったとき茨城や栃木の人はイとエの区別ができないといってわらわれたのを思い出しました。そのうえ粗忽ものとして今朝郵便局へ原稿を送りに行って五百円だといわれ財布を見たら四百九十五円しかないので往復二回いい運動をしました。了

一九八八・一〇・二〇



科学史に関心を持つものの団体を作ろうという動きは吾々よりも京都の方が早かった。何年であったか思い出せないが、科学史学会の胎動よりも何年か前である。京都大学と三高の先生方七、八人が発起人で、私も趣意書を貰ったので早速賛成の返事をしたが、この話は実らなかった。平田寛さんの「科学史学会創立のころ」(『ガリレオの椅子』所収)によると資金が集まらなかったからだという。平田さんの文中に菅井さんと私の所へその趣意書が届いたことも記されている。

わが科学史学会の動きは昭和十一年(1936)に現われている。忘れもしない29の事件の起こった日にその相談会を開くとの連絡を私も菅井さん受けて出席の返事をしておいたのだが、思わぬ事件が起こって私は欠席してしまった。そのころ私は東大工学部に勤務していたが、みな緊張して中には反乱軍が大学へも来るかも知れないという者もいた。大学当局からは別に何の指令も出なかったが、吾々はそれぞれ学科事務室に集まってかなりおそくまで情報を待つなどしながら不安な気持ちでいたのである。

そのご私は相談に呼ばれることはなかったが、上記平田さんの文によると、菅井さんが金づるを見つけて着々と準備が進められていたのである。もし相談にあずかったとしても、資金調達などには全く無力な私であるから、何の協力も出来なかつたと思う。昨年(1990)の講演「回想五〇年」で話したように、私は身辺多忙になつたことも重なって、発会式にも参列できないことになつてしまつた。ただ『科学史研究』に原稿を送ることで自分なりの協力はしたと思つている。

あれから五〇年、昔は人生五〇年といったほどで、決して短い時間ではない。よく今日まで続けられて来たものと思う。元来そう多くの会員があるはずのない学会であるから、まず順調に進んで来たものとしてご同慶の至りである。

欧文誌の創刊は私も編集委員の一人であつた頃のことであるので、第一期の誌名のことに少しふれて置きたい。あれは私の案ではない。数名の編集委員の中からあれを提案した人があつて決めたのであるが、提案者はN君ではなかつたかと

思う。今更詮議するわけではないが、*Japanese Journal*…… というのは他の学会にもあるから、まずよからうと思いい私も賛成したのである。ところがしばらく経って *Japanese Studies* にかかるとかかるとかのように解釈する人があって、「日本の科学史」の雑誌という印象を与える恐れがあると言われて、なるほどそうかと思った。

私はサートンの *isis*、また *Quinis*、フランスの *Thales* などを考えて何かいい名称はないかと内心模索していたが、適当なものが思い浮かばないまま上記のような結果になった。改められてラテン語のまばゆいばかりの雑誌になったのは誠に誌名に負けない優れた欧文誌にして貰いたいと思う。名前は本来甲と乙とを區別するための符丁のようなものだが、仲々どうして「名は体を現わす」と謂われる大切なものである。さっぱり売れなかった歌手が名を改めて売れるようになった例もある。これは脱線してしまったが、科学史学会の健在を祈ること切なるものがある。

